
鴉渡り・・・。

JUMBO!!

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

鴉渡り……。

【Nコード】

N6827Q

【作者名】

JUMBO!!

【あらすじ】

昔、この世に別れを告げた男は新たな世界で平穏を求めた……。

後にBETA大戦と呼ばれる戦いを生き残り……、第三次世界大戦で超大国を打ち破りつかの間の平和を取り戻した男は築き上げたものと共に新たな世界に渡る。

プロローグ（前書き）

文章は基本的に駄文です。気をつけてお読みください。あと、ご都合主義・火葬戦記となる予定です。ご注意ください。

プロローグ

かつて、戦争があつた。緑の星・・・地球は・・・戦火に包まれ、
一時期は数十億もいた人類は半数も殺されてしまった。

それは・・・・・・・・・・人類に敵対する地球外起源種、通称：
BETA・・・・・・・・・・また、BETAとの戦いを人類はBETA
大戦と呼んだ。

そのBETAは圧倒的な数に物を言わせ、人類の発展を嘲笑うか
のように地球圏の惑星と地球の半分を自らの支配下に置いた。

しかし、人類は反逆してBETA大戦が始まって50年余りでや
つらを地球圏から駆逐することに成功した。そこには二人の男と一
人の魔女、三人の英雄の存在が無ければ絶対に成し遂げられなかつ
た。と言われるほど厳しい戦いだった。

だが、一部の人間は人類の危機でも自らの利益を優先し、自らを
世界の覇者と呼んだ。そして、自らを脅かすものを次々支配下に置
き始めた。そう、人類は互いに血肉を争い削りあつたのだ。

しかし、最後は三人の英雄を要する極東の小国が自らを世界の覇
者と呼ぶ超大国に、勝るとも劣らない力で屈服させ、超大国の権威
失墜と共に争いを治めた。

一人の男の名は・・・【白銀武】・・・幾多の世界を旅し、愛するものを何度も失い、諦めずに戦った孤独な旅人。

唯一の女の名は・・・【香月夕呼】・・・数多の若人たちの命を喰らい一人その咎を背負った麗しき女傑・・・。

最後の一人の名は・・・【榎谷広和】・・・若干十歳で新たな技術を次々と世に送り出し、世界最強の砲撃手と呼ばれた。

この物語はそんな混沌とした世界を生き抜いた者の新たな世界で、過酷な運命に立ち向かい自らの平穩を求める男の手記を元に作られた物語。

プロローグ（後書き）

此度、自作小説を投稿させていただきJUMBO!!と申します。文章については全く自信がありませんが。皆様が見やすいように細かく修正や改稿いたしますのでコメントなど御寄せください。

第一話 被災

?????年?月?日AM12:00 静岡県初島

ここは静岡県初島にある軍基地の一室……。だが、その室内は本棚や植木鉢が倒れ、ありとあらゆる物が散乱していた。さらにそのなかで一人の男が倒れていた。

「……うつ、……クソ、あいつまた飛ばしやがって……。ここは……。基地の中か?しかし、さっきの揺れはなんだ?やっぱりあいつの所為か?ここ自体やわな設計で作ってないのに……。よし、電気は生きてるな……」

男はぶつくさ言いながら部屋を出た。それから廊下を急ぎ足で歩き突き当たりのエレベーターに乗り込み司令室のある階に向かう。

?????年?月?日AM12:10 日本帝国軍初島基地司令所

男が司令所と書かれたドアにカードキーを通して扉を開ける。

「！あ、広和様ご無事でしたか！！」

男が指令所に入室すると20代の女性が安心したように広和と呼んだ。

「ああ、俺はエレベーターに閉じ込められたがシャフトを上って来たから無事だ。・・・おい、お前・椿若くなつてないか。」

「えっ！それは広和様が？！ではないのですか？」

「何？！」

二人が互いに驚き室内を見渡すと他の人達もそれぞれ、自分達が若返っている事に驚いていた。（実年齢51歳の広和も見た目20代の青年に見える。）

「兎に角、他の部隊や基地には連絡がついたか？」

「いえ、未だに各帝国軍基地には連絡が着いておりません。

一応、連絡がついた部隊はこの初島基地所属の全部隊と訓練の為に移動中の帝国軍富士基地所属・機甲教導団第二大隊、教導団普通科歩兵第一連隊、教導団機械化歩兵第一大隊と、同教導団の輸送任務に就いていた海軍横須賀基地所属・第63輸送艦隊の旗艦【伊吹】を含む20隻のみです。

それと異常としては基地内の全ての電子機器が1923年9月1日を指している事ぐらいです。多分こちらは機器の故障かと思われます。」

「そうか、・・・だと良いがな。一応、全艦隊をこちらに戻しておいてくれ。それで今分かっている戦力をまとめてあるか？」

「「こちらに・・・。」

椿が事前に準備しておいたのか、脇に抱えていた資料を浩一に渡す。

最近独り言が増えてきた浩一は「陸上戦力が・・・。」などと咳きながら資料に目を通す。

- 三個戦術機甲連隊（戦術機364機）
- 七個機甲大隊（戦車200両・支援車両90両）
- 三個機械化歩兵大隊（機械化歩兵装甲200機・支援車両24両）
- 二個歩兵連隊（支援車両24両）
- 一個警備歩兵大隊
- 一個整備連隊
- 一個施設科連隊（支援車両10両・工作車両20両）
- 一個輸送大隊

「と、次に海上戦力が四個艦隊60隻余りで、最後に航空戦力が・・・
・一個航空輸送中隊と二個戦術輸送小隊、一個航空戦闘大隊、一個航空支援大隊・・・ってことか。この基地は大丈夫だな。」プシユー

「遅れてしまい申し訳御座いません。広和様。」

広和が愚痴っているとまたドアが開き、見た目が18歳位の女性が入ってきた。

「来たか！魅・・・耶？・・・お前も若返ったのか？！」

「えッ！広和様が若返ったのでは？」

広和が驚きながらも長年付き添っている伴侶の名前を口にする。

ちよつとした桃色空間を醸し出していたが「広和様、魅耶様。」
椿に呼ばれ軍人らしい顔つきに戻る。

「すまん。何かあったか？椿。」

広和は多少脅えながらも何かあったのかと思い聴く。

「ただいま、通信兵から報告がありました。たった今、モールス信号で『東京ニテ大地震発生。至急救援ヲ送ラレタシ、発信・帝国陸軍府中基地』と発信され全国の帝国軍と思われる他の基地から発信が相次いでいます。まさかとは思いますがもしかしたら本当に私達が過去に……。」

「おいおい、まさか椿は俺達が過去に飛ばされたとしても言うのか？
しかも、大正十二年九月一日の日本……いや、大日本帝国に……。」

広和はこのなんともいえない雰囲気には既知感を覚えていた。

第一話 被災（後書き）

第二話 決意（前書き）

今回は文章の量が膨大になっています。ご注意ください。

第二話 決意

1923年9月1日1245時 帝国軍初島基地司令部

「大将！今から介入しては日本が他国から狙われる事になります。考え直していただけませんか？」

この司令部で参謀の一人が声を大きくしていた。

それはあらかた地震と現在の情報が集まりこれからの行動を決めるために広和は初島基地に居る幹部将校を集めて会議を行なっていた。議題としては『もし、我々が過去にタイムスリップした場合。現地の政府や軍と接触するか、しないか。』といったものだった。

会議は概ね現在が広和達の2031年から見て過去ということを確認して、現政府に接触する方向で固まったが。今後、我々が介入する事に伴い起こりうる歴史の改編や他国への影響を考えて、この震災から介入していくか、多少時間を置いて徐々に介入するかで意見が分かれていった。

その中で声を大きくする参謀は時間を置く方が良いとっている人物だった。

その背景にはBETA大戦後の2020年に起こった・・・日本の技術を欲した世界各国が日本へ技術の放出を求めた。日本は段階的ながらも徐々に開示したが、それを我慢出来ずに我が物にしようとして大国アメリカ・ソ連が日本に侵攻した・・・所謂、第三次世界大戦が勃発した。

最終的には開戦から一年後の2021年、日本帝国が辛勝した。当事者であるアメリカは多大な犠牲を払い敗北し、その代償として技術の開示することが無くなりさらには莫大な賠償金を課せられた。また、ソ連は国家自体が崩壊し、さまざまな国や地域に分離して世界各国にあつた社会主義国家はほとんど崩壊していった。

それから数年後、いろいろな事が起こつたが日本は平和を噛み締めていた。また、そんな事があつて人々の考えは変わり大国には屈しない独自性の強い軍隊や国政に繋がつてゆく。

細かい事は追々話す事にするがアメリカに対して日本国民は憎悪の感情を抱くようになった。そして、それは帝国軍に所属する広和達も同じであり少なくとも今後起こる大東亜大戦で日本帝国が降伏することはよしとはしなかつた。

そんな事があつて現在から介入するリスクと後々介入するリスクについて話し合われているのがこれまでの状況だ。

おっと、自己紹介がまだだつたな。

俺の名前は『榎谷広和』一応もう一つ名前があるけど今は秘密にしておいてくれ。

職業は軍人、日本帝国軍の四軍（陸・海・航空宇宙・斯衛軍の事）に所属している階級は実質トップの大將だ。あと、榎谷技術研究所つて言う会社の社長もやっている。
家族構成などはまた機会があれば・・・。

「……………確かに俺もに下手に動いて政府や軍を刺激したくな

いのもわかる。

「……だが、それよりも今は助けを求めている人々が居るのであれば俺達が行かないといけないだろう。……違うか？」

「……いえ、それは……。」

広和の真剣な目に声を荒げていた参謀を含めて司令所にいた全員が息を呑んだ。

「それに俺は俺達がいっ、元の時代に戻れるのか分からないし、手段がないのであれば……。」

「……皆にはすまないが……俺は歴史に介入する。」

「しかし！それは！」

参謀の一人が声を張り上げて静止するのを落ち着かせ、広和は自身の考えを口にする。

「まあ、待て。いくら俺でも全てを晒すわけじゃない。それに今現在を大切にしないと俺はいけないと思うんだよ。助けられるのに助けられないのは人として違うだろう。」

やはり根本的なところで助けられる命があるのなら助けたいと思うのか参謀も黙る。

「俺だって技術を公開するのに時間を掛ける事が悪いとは思ってな

い。だが、三度もアメリカに裏切られるのは皆も嫌だろう。」

広和の言葉に司令所に居た者たちは全員が頷く。

「だったら今から介入した方が良い。力を蓄えて対米戦をやったほうが楽だろ。」

それに俺が最初にしようと考えているのは帝国軍の意識改革だ。粉骨碎身・挺身攻撃の精神でとか言っているのと陸軍の拡大主義を直してやるのさ。……もちろん俺達の技術を見せるのは徐々にだが、妄想を抱いている奴らには現実を見せてやるのも忘れない。

……それで、改革が第二次大戦開戦までに出来なければ最悪、我々はここに独立国家を建てる。この時代の政府がどう言おうとも手立ては有るからそこは安心してくれ。」

流石にBETA大戦を生き抜いた英雄の言葉には誰も反論できないでいる

「それと話をかえるが俺達の現代戦において重要な事は何だ？……じゃあ、……織田中佐、時間がないから手短にな。」

広和が隣に居た女性中佐を指名する。

だが、彼女の顔つきが何処と無く広和に似ている……。いや、横に並べば兄妹と見間違えるだろう。

「はッ、それは情報・物資・戦術・士気 of 四つであります。閣下。」
「OK。正解だ……。魅緒「閣下！」悪い、悪い……。癖でな。」

広和が答えた女性仕官の頭をなでて怒られながらも思わず口にして魅緒と呼んだ女性は苗字が違うが広和の娘だ。顔が似ているのは

当たり前だろう。

彼女の名前は織田魅緒、階級は中佐。性格が委員長っぽく規律には広和以上に厳しい。

「・・・では、その中で情報を手に入れるにはどういった方法がある。分かるものは手を挙げてくれ・・・。」

再度、広和が質問するが参謀達はお前が答えろと視線でやり取りしていた。

「はい。」

静かに成っていた司令室に斯衛軍の制服を身に着けた銀髪の白人女性が手を挙げる。

「よし、榊谷中尉。」

広和は呆れるようなやり取りの中に手を挙げた自分の義娘に微笑みながら指名する。

「ありがとうございます。御座います。閣下。情報を入手するのは通信の傍受・文書等の奪取・会話での直接入手があります。それと閣下の考えはこうではないでしょうか。」

震災の救援とついでに現地住民からの情報収集を行なうことで現状の把握を行なうのではないですか？」

自信満々に答える榊谷絵里栖中尉。彼女は広和がロシアから引き取った義娘だったりする。(2031年で30代後半の筈だが。やはり二人とも若返っている。)

「うーん、ちょっと惜しいな。」

絵里栖は残念そうにしているが何処となく嬉しそうだった。

「とりあえず、絵里栖の説明でいくらか分かってもらったと思うが、一つは情報収集、二つ目は現状把握、三つ目に俺達の技術力を軍に見せ付けるためだ。

一つ目と二つ目は中尉が答えた事だから説明は要らないだろ。

残る三つ目については二つ理由がある。一つはさつきも言った歴史への介入、理由が知りたければ後で俺の部屋に來い。とことん説明してやる。

もう一つはここに居る人員の生活を支える為に行なう。」

広和が指を折りながら説明して最後の理由のところで別の参謀が手を挙げた。

「それは資金の問題ですか？」

「そうだ。別に俺の金から出してもいいが出来たとして十年ぐらいだろう。それにこちらで使えるかといわれれば確実に使えないだろうからな。」

それともう一つ住居の問題がある。いくらフロートや基地の宿舎があるって言っても10万人近く居る人間をこの狭い島に詰め込む気か？」

資金の問題も有るが居住スペースが限られているのも確かだった。

「広和様。そろそろ出発のご用意をしなければならぬのでは？」

魅耶が会話を断つように広和に進言する。

「ああ、そうだな。椿、用意はどれくらいで出来る？」

「はっ、航空戦力・戦術機部隊は直ぐにでも発進が可能ですが。現状の準備と安全を考えますと厳しいかと、それと海上戦力は停泊中の第一強襲機動艦隊を除き、各艦隊は未だ相模湾海上をこちらに向かっていてところで御座います。」

基地の準備状況を聞きながら広和は思案する。

「では、基地全体に防衛基準体制2を発令！ 宿舎内の人員を総員起こせ！」

戦術機部隊は東京・千葉へ、第63輸送艦隊並び、富士教導団部隊は横浜・熱海・小田原へ先行し被災者の救助に当たれ！

また、全機械化歩兵部隊は30分以内に第一強襲機動艦隊に分乗し東京に向かえ！

残る第二・第三強襲機動艦隊は当基地に寄港後、機甲部隊と救援物資を乗せて第一強襲機動艦隊と共に東京湾・相模湾に展開し救助と治安維持に当たれ！

各ヘリ部隊は消火装備を装備して被災地の消火活動に当たれ！ それと歩兵・警備歩兵部隊は第901航空輸送隊の輸送機に搭乗、空から降下して被災地で救助活動を行なえ！

当基地には警備として警備歩兵一個中隊・一個機甲中隊を残し、全戦力を被災者救助に当てる。

それと余震には十分注意して行動してくれ、最後に行動時は情勢が安定するまで絶対に複数で行動せよ。最後の命令は厳とせよ。1923年9月1日1255（ヒトフタゴゴ）発令！

尚、この命令は帝国軍参謀本部を通さず、帝国斯衛軍大将・崇宰広

和の独自の判断による命令である。以上！」

『ハッ！！』

命令が発令され基地全体にアラームが鳴り響く、休暇で寝ていた者や休憩していた者も一斉に所定の場所に向かう。

広和と魅耶は戦術機格納庫に向かう為、外に出た。流石に基地司令が歩いて来る為に隊員たちが一々敬礼してくるのを「さっさと持ち場に行けー！！」と広和は一喝してしまう。

「だあー、めんどくせえー。」

「フッフ、まあまあ、落ち着いてください。それではまともな判断が出来ませんよ。」

「ああ、すまない。……ところでお前は反対しないのか？歴史に介入する事を……。」

落ち着いたところで広和が魅耶に歴史について聞いてみた。

「私は広和様について行くと。昔、申し上げたではありませんか？」

「いや、俺が言いたいののは榊谷魅耶では無く。九條魅耶としての意見が聞きたいんだ。」

「フッフ、そういうことでしたら広和様と意見は余り変わりませぬわ。」

私として申し上げるのですたらこの国がどう変わっても潰えぬ誇りと伝統が残ればいいと思いますわ。」

「そうか。それを聞いて安心した。後はこの事が終わってからだな。よし急ぐぞ。」

「はい！」

。二人は息を合わせて走り出す。より良き未来を掴む為に……。

第二話 決意（後書き）

ご意見・ご感想お待ちしております。

第三話 救助

1923年9月1日1406時 大日本帝国・東京

かつて世界最大の人口を誇った江戸の町並は建物という建物が軒並み倒壊し一部では火の手が上がり地獄絵図と化していた。怪我がないものは逃げ惑い、何処に行けばいいのか分からなくて彷徨う人々が居た。

辛うじて建物に押し潰されなかった子供が梁と地面に挟まっている親を助けようと必死に持ち上げていたりしていた。しかし、親は今にも息絶えかけている状態だった。

「父ちゃん！母ちゃん！死んじゃ・・・、死んじゃ嫌だよ。」

「早く逃げる！信夫、俺達に構うんじゃあねえ。」

「大丈夫。あなたは強い子だから大丈夫。だから逃げてここは危ないから逃げて・・・。」

だが、無常にも信夫の親が下敷きになっているかつて我が家だったのも火が点いてしまった。

「早く行け、この馬鹿者が！お前まで死んでしまったら。わしらの墓を誰が守るんじゃ！早く逃げんか！」

「嫌だよ。父ちゃん僕達だけで逃げるなんて出来ないよ。」

「そうよ。・・・貴方だけでも行きなさい。・・・あなたの妹達と私達は貴方といつても一緒だから・・・ね。」

「嫌だよ。みんな一緒に逃げないとだめだってばあ・・・う・・・わあーん、・・・誰か父ちゃんと母ちゃんを助けてよー!!」

信夫の叫び声も虚しく空に消えていくかと思った瞬間、キーンと独特の音を出して空から巨人が降りてくる。

「・・・わあー!!」

信夫も風で飛ばされそうになってしまいが、母親が手を握り必死に飛ばされないようにしていた。幸運にも家についた火は消えていた。

そして、巨人が地面に降り立つと親が挟まれている家の梁に指を掛ける。

「やめろー!母ちゃん達に触るなー!!」

信夫は慌てて巨人の指を剥がしに掛かるが子供・・・いや、人の力ではどうする事も出来なかった。

『邪魔だ!坊主!』

「ひゃ!!」

突然の大きな声に信夫は腰を抜かして周りに水溜りを作ってしまった。

巨人は何事も無かったかのように両手で梁と屋根を持ち上げ近くの大きい道路に置いた。
そして、また巨人が戻ってくると今度は膝をつき胸の辺りに穴が開きそこから男が降りてきた。

「あ、あ、ああ、あ・あ・あ」

「・・・すまないな。怖がらせてしまって・・・立てるか？」

「えっ！？・・・あ、あ・あ、はい！」

「よし、強い子だ。」

信夫は頭を涙でくしゃくしゃにされながらポカーンとしていた。

「ちょっと、待ってる。お前の親の手当てをしたら直ぐに戻ってきてやるから。」

「はい。」

男が両親の元に向かってしばらくすると戻ってきた。そして、信夫には見覚えのある赤ん坊達を抱えて戻ってきた。

「待たせたな。ところでこの子達お前の妹達か？」

男が赤ん坊を見せると信夫は・・・。

「望！信子！」

「しいー、コラ、この子達が起きちまうだろ。・・・でも、良か

ったな。お前のご先祖様がこの子達を助けてくれたみたいだぞ。」

「えっ！どういうこと？」

「あそこの居間があった辺りの小さい布団の上に仏壇があったから気になって仏壇を起こして開けてみたらこの子達が居たんだ。」

多分、上手い具合に仏壇が倒れて、その中に望と信子だっけ？この子達がすっぽり入って落ちてくる壁や屋根から守ってくれていたみたいだな。

あと、お前の両親も今は落ち着いて、その木の陰に寝かせてあるから。」

男は双子を抱えたまま被害を受けてない木を見る。信夫もその視線を追ってみるとそこには両親が木に寄りかかるように寝ていた。二人・・・四人は木の元に向かう。

「お前はこれ持って両親を見ていてくれ。おじさんは仕事があるからな。」

男が上着から筒を取り出して信夫に渡す。

「えっ！お兄さんじゃなくておじさんなの？」

「・・・プっ。そうだ。」

信夫の純粹な感想に男は笑いながら赤いボタンの付いた筒みたいな物を渡した。

「その使い方な、何か有ったら赤いボタンを押してくれよ。直ぐ

俺が駆けつけてやるからな。

ぼう・・・そう、いや名前聞いてなかったな。俺は広和、榊谷広和っていうんだ。よろしくな。」

「あ、僕の名前は鷹田信夫です。」

信夫の元気な返事に頭をなでる広和は笑顔を浮かべ巨人のほうに向きながら。

「じゃあ、信夫、今から30分位したら兵隊さんが迎えに来るからその人にその棒を渡してくれよ。あと、これから一人になると思っけどちゃんと待ってられるか？」

「うん。僕が父さんと母さんと望と信子を守らないといけないんだよね。」

広和は「そうだ。」といって、巨人の元に向かい胸の中に入っていった。信夫は大きく手を振って巨人を見送る。

巨人は空高く飛び上がり黒煙が上がる東京の東に向かった。

信夫はこの時、将来の夢に軍人になると決めたのだった。後に広和と信夫は再会することになるのだがその話はまたの機会になる。

さて、この救助活動の間にトラブルが無かったと言えば……有った。

しかも、初島で……だが、初島で有ったトラブルは突如現われた我々に現地住民が怪しんだ事だった。

しかし、副司令の魅耶が外向き顔を見た数人が驚き、掌てのひらを返したようにペコペコしだしたのだ。

理由を聞いてみたところ去年の夏に将軍がこの島に避暑に訪れ、魅耶がその将軍に良く似ていたから将軍の縁者ではないかと思っただけらしい。

事実、当代（1923年）の将軍が九條家当主になっていることが後に判明している。お陰で魅耶が政府との交渉が楽に進んだのは後々話そう。

一応、島が津波被害に遭った為、家屋が軒並み倒壊し家屋の下敷きになった人や怪我人と波に攫われた人も多数居たが、島に残っていた歩兵部隊や運良く基地に戻ってきた艦隊に全員救助され、奇跡的に死者は出なかった。

それから出発前にいた施設科連隊に島民52人用のプレハブ小屋を作ってもらい一時間あまりで完成させてから東京に出発していった。施設科の連中にとっては簡単なものらしい。

また、東京でも一部の暴徒と化した被災者達が救助していた歩兵部隊と衝突したが、戦術機などの救援（被災者が巨人（神）を使いと勘違いした。）により、沈静化させていった。

第四話 衝突？

1923年9月1日1650時 東京・特派第901歩兵大隊指揮
テント

救助開始から約三時間後ようやく救援に駆けつけた軍と歩兵の一部部隊が膠着状態になっていた。

旧帝国陸軍第四師団隷下第六歩兵大隊と特派901歩兵大隊（初島基地所属）がテントの前で睨みあい、お互いに緊張だった。まだ、武力衝突にはなっていないのが幸いかも知れない。

一応、このテント内で両部隊の大隊長同士で話し合っていたが。未だに旧軍側の大隊長の中佐が指揮系統の一元化を求めて、階級が上である剣崎誠大佐（901歩兵大隊長）に対して一方的に言うため埒が明かなかつた。

理由として、斯衛軍にはそのような部隊・人員が存在しないこと、今回の震災において勅命により第四師団司令部が関東近県の治安維持・救助活動などの指示を一任されていること、が挙げられた。

剣崎も一方的に言われるつもりは無く。「我々は軍との指揮系統が独立している為、上官の許可が無ければそちらの指揮下に入る事が出来ないのでは話を通してからお願いします。」

これから呼び出しますのでしばしお待ちを……。」と云って剣崎は現地部隊への対応で言われていたこと……この特派救援部隊の最高責任者である広和を呼ぶ事……を通信兵に命令していた。

そして、通信兵から広和が来るまでに20分ほど掛かる事を相手に伝えて広和の到着を待っていたのだった。

「貴官の上官はまだ来ないのか！約束の20分など当に過ぎたぞ！」

「もう直ぐ来られますのでお待ちください。」

「そのもう直ぐと行って何度も聞かされている身にもなってみろ！もし貴官が言っていた事が嘘だった場合、この場で貴様らの部下ごと葬ってやる！」

中佐は得体の知れない者・・・自ら斯衛軍大佐という男・・・に對して鬱憤を晴らすように怒声を浴びせるが・・・それに劍崎大佐は落ち着いて・・・と言うよりは呆れたように・・・

「ええ、それでも構いませんから落ち着いてください。」

劍崎は相手の劍幕に疲れながらも落ち着かせるように言う。・・・が。

「ええい！何故、貴様のような若造になだめられねばならんのだ！もう、我慢ならん！この場で切り捨ててやる。」

旧軍中佐の言う通り見た目、20代ぐらいに見える劍崎大佐は若

造だろうが、実際は50代後半を過ぎている（見た目以上に落ち着いているのはその為だ。）。

しかし、完全に目が逝っている旧軍中佐は腰にさしていた日本刀に手をかけた。

流石に小言を言われ続けた剣崎を怒らせるのには十分だったが・
・ドン！！と何か巨大なものが近くに落ちる音がした。

その音に中佐は驚いていたが剣崎はもうこれ以上小言を言われな
いで済むと思いい安心していた。

「お待たせいたしました。本官の上官がお見えになりました。」

剣崎の言葉共に側にいた安堵した副官が、テントの入り口に向か
い上官を迎え入れた。

同時に外では旧軍の兵士たちが上空から現われた巨人に驚き、ほ
ぼ全員が腰を抜かしていた事を明記しておく。

そして、一人の青年がテントに入ってきた。

背は完全に日本人離れして2m近くあるように見受けられたが顔は
日本人の顔だった。

「すまない。遅くなった剣崎大佐。」

「いえ、ちょうど良いタイミングでした閣下。」

そう言ってテントに入って来たのは傍から見れば可笑しな服（衛

士強化装備の事)を着た18歳位の男・・・広和だった。しかし、その姿を見た旧軍大佐は笑い始めた。

「・・・クククク、ハハハハ、ふざけるな!!何が大将か!たかが小僧ではないか!貴様らの戯言など聞き飽きたわ!

神であらせられる天皇陛下の神軍である皇軍を語るとは不届き千万!このわし自ら成り「おい!」な・な、な、なんだ貴様!」・・・黙れ!」ヒイ!!!」

高説を語っていた大佐に切れた大将・・・いや、広和は黒い才一ラと凄まじい殺気を出しながら大佐を黙らせる。

「・・・言っておくが。俺はこれでも五十数年を生きているんだ。人を見た目で判断してんじゃあねえ。

それにこつちの剣崎大佐も俺と同じ年数を生きている。今度、貴様らが俺の部下達を馬鹿にするようであれば誰であろうと・・・殺す!!!」

「ヒイイ!!!」

広和の怒気と殺気にやられたのか大佐は腰を抜かしてしまった。それを見た広和は・・・。

「ほう・・・これだけの殺気と怒気に当てられて気絶しないとは以外にも中々の胆力を持っているみたいだな。」

「そうですね。閣下。」

「あ・・・あ、ああ、ああ・・・。」

少し驚いた様子で剣崎と笑っていた。しばらくして広和は中佐に手を貸して起こして席に座らせる。

「さて、落ち着いてきたところで自己紹介と行こうか。私がこの歩兵第901大隊を始めとする帝国軍特別派遣教導技術部隊・総隊長の崇宰広和斯衛軍大將だ。階級は他にも海軍大將、空軍中將も持っている。これでよろしいかな？大佐。」

「はっ、はい！さ、先程は失礼いたしました！！」

「いや、大佐。そこまで畏まらなくていいから。」

「いえ、閣下に・・・しかも、あの（・・・）五撰家の方に失礼な文言を吐いた本官のけじめであります。」

中佐の毅然とした態度に広和も先程の失礼な態度も謝った事で許した。例えそれが見え透いた中佐の狸寝入りで有ってもだ。

「そうか、そうならば先程の事は許そう。・・・で貴官の名は？」

「私は大日本帝国軍第四師団隷下第三連隊第301大隊・大隊長、寺内寿一陸軍大佐であります！」

姿勢を正して広和に相対して自分の所属と階級をいう寺内中佐。

「そうか。では、気を持ち直したところで話し合いと行こうか。」

『ハッ！』

正気を戻した寺内と広和達は各部隊の配置と治安維持、食糧の配

給などを話し合った。

さらに寺内中佐の名前で海軍・横須賀鎮守府宛に「今後の震災復興について重要な事を話したい為、会議を催す。そのため、明日二日正午に帝国軍第901大隊仮設司令部に将官数名、もしくは参謀数名を出席されたし」と電文を打たせた。また、陸軍・第二軍司令部（第四師団の上部組織）宛にも同じ文面の電文を送っている。

その日は初めて見た巨人（戦術機）に旧軍の人達は驚いていたが、寺内の協力もあり被災者の救助はスムーズに行なわれた。

第五話 介入

1923年9月2日1150時 東京

前日に打診されていた緊急会議に出席する為に横須賀鎮守府から車が八両、東京に向かって走っていた。乗っていたのは帝国軍連合艦隊司令・竹下勇大將や、後の連合艦隊司令・山本五十六大佐の姿があった。

なぜ、このような海軍の重鎮達がたかが陸軍の一大佐である寺内大佐の召喚を受けたかと言えば……。

昨日、相模湾沖合に出現した超弩級空母四隻を含む艦隊が気になる事を言っていたからであった。

前日、9月1日に演習があつたため連合艦隊大半が相模湾沖に停泊していた。そして、突如目の前に現われた所属不明の大艦隊に停船を求めたが……。

「我、日本帝国軍第一強襲機動艦隊旗艦【天城】ソチラノ要求ニハ答エラレナイ。尚、明日、東京ニテ緊急会議ヲ催ス。ソチラニ出席サレタシ。」

と返されて駆逐艦でも追いつけない速度でそのまま東京湾に消えてしまったのだった。

そう、突然、二十隻もの艦隊が消えてしまったのだ。それも狭い東京湾内で……だ。

東京湾内に侵入したところまで連合艦隊各艦でも確認していた上、房総半島や三浦半島の住民にも確認が取れている。謎の「第一強襲機動艦隊」と名乗る一団が何処に消えたのかは分からなかったが、半島の一部住民と最後まで艦隊を追尾していた第11駆逐隊の見張り員達が気になる事を言っていた。

それぞれが口裏を合わせたように「船が幻のように消えた。」と言っていたのだ。

これを聞いたもの達は「そんなことはありえない。」などとその見張り員を「不名誉除隊にしろ！」と、言うものまで現われた。

最終的には一刻も早い被災者達の救助を行なわなければならない為、議論は一時中断された。

もし、見張り員の言う通り、何らかの技術によって船体を隠す事ができるので有ればその技術を有する国が世界の覇権を手に出来るだろう。

しかし、どう考えても今の日本、いや世界中の技術を持ってしても艦隊が消えるような装備や技術は作れるはずが無い。おっと、今は被災した市民の救助に当たらねば。

それからしばらくして例の電文が届き、東京湾へ向かった連合艦隊の主だった人物が会議に出席する為こうして車で移動していたのであった。

同時刻、帝国陸軍第三軍第四師団長・村岡長太郎中将を始めとする第四師団の参謀たち数名が車で同じく移動していた。

「しかし、寺内は何時、我々を呼び出す権限を持ったのか。知っておるものはいるか？」

突然、村岡中将が同乗していた参謀や運転手に質問をするが・・・誰も答えられない。

「誰も答えられるわけがないか。あの見慣れない装備で全身を固めている部隊を見れば・・・。」

自棄気味に本音を漏らす中将に車内の全員が心の中で頷いていた。そして、沈黙に落ちていた内に目的地に着いたのか運転手が驚きながら「どうやらここが目的地のようです。」とやっとの事で声に出した。勿論、中将達も目の前の光景には驚いていた。

そこは周りが廃墟であるにもかかわらず、時代錯誤を感じさせる五階建てのビルが建っていたのだった。

そのビルの入り口には【日本帝国軍特別派遣教導技術部隊臨時仮設司令所】と書かれ、ビル周辺には迷彩色の天幕がいくつも建ち、被災者たちが補給部隊と見られる見た事の無い軍服を着ている

軍人から炊き出しのおにぎりや、味噌汁を食べている姿があった。

「……これはなんだ。……これがあの大地震に見舞われた者達なのか？これでは寧ろ片田舎の方よりもいい生活を送っているではないか。」

それを見た村岡中將が呟いき、参謀達もまた頷いていた。配給品と見られる食料やその入った器、寝泊りをしている天幕に至っては陸軍が採用しているものよりも丈夫に見える。

そして、後ろから声を掛けた人物が居た。

「そうでしょうね。でも、一部の陸軍将校がこの姿を見たら激昂して罪のない民達を平気で切り捨てるでしょう。」

「ん？貴官は誰だ。」

「これは失礼しました。中將。私はここの総責任者である日本帝国軍特別派遣教導技術部隊、通称特派の総隊長を務めている崇宰広和と申します。階級は斯衛軍大將です。」

広和は自分の所属を言った後、流れるような動作で敬礼した。それを見た村岡中將や同伴の参謀達も見た目は若いが一連の動作と五撰家に連なる名を冠している事でそれ相応の地位にある人物だと思っただのか全員が驚きながら一斉に敬礼した。

「いえ、こちらこそ失礼致しました大將閣下。無礼な口利きをしてしまい。何卒、平にご容赦を。」

「いえ、初めて顔を合わせたのだからそれは仕方の無いことですか。それにまもなく裕仁様と実篤將軍がこちらに御着きになられるので準備をされたほうがいいかと思いますが。」

昨日の寺内大佐と同じように畏まる村岡中将に頭を上げさせて、まもなく裕仁親王がこちらに御着になられると聞き中将達は首を傾げた。

中将が「それはどういったことでしょうか閣下。」と広和に聞こうとした時、遠くから何かが風を切る音が聞こえていた。

そして、広和が「ご到着されたようです。」と言って手を指した方向に顔を向けると空に大きな見慣れない航空機が三機飛んでいた。

それは見る人が見れば分かるものだった。

「あれはオートジャイロ!?」と数人が声に出して驚いていた。

そう、回転翼機・・・この時代で似たようなものと言えばオートジャイロと呼ばれるヘリコプターの元型になったものがある。

しかし、遠くの空に浮かぶそれはオートジャイロよりも大きくとスリムな形をした胴体、操縦席がある部分に至ってはこの時代では作れない大きさの機体だった。

そのは広和達が居た2031年に登場したばかりの帝国軍最新鋭攻撃ヘリ二機と広和が個人で所有する旅客ヘリが編隊を組んでこちらに向かって来ているところだった。

三機の編隊は先頭にMHP-131VIP、その後ろにMH-31B二機が護衛に就いていた。やがてヘリはビル前の大通りに着陸し、中から魅耶を先頭に男女数人がヘリから降りてきた。

その光景を見た村岡中将を始め、事前に到着していた海軍の竹下勇大将達も総員総出で出迎えた。

そして、広和はヘリから降りてきた人物の前に片膝を着き、頭を下げた。

「殿下。遠路はるばるようこそ御出で下さいました。多忙な中失礼を承知の上で御連れした事を深くお詫び申し上げます。」

「よい、そなたがこれからの日本を良くしようと私を呼び出したのだらう。この後、あの立派な建物で、これからのことについて話してくれると九條中将から聞いておるぞ。」

「はい、では、参りましょうか。裕仁親王殿下。」

裕仁親王は広和に連れられビルの中に入った。しばらく、裕仁親王の付き添いで来た者以外は「何故？撰政官が・・・。」と放心していたが魅耶の呼ぶ声に反応し全員がビルの中に入った。

そう。魅耶が連れて来たのは次代天皇・現撰政官裕仁親王だった。裕仁親王以外にも当代征夷大將軍九條実篤や、現首相山本権兵衛、その他陸・海軍両大臣ら数名も同行してきたのだった。

第五話 介入（後書き）

いつも御覧いただきありがとうございます。御座います。

私が会話文を作るのが苦手な為に更新が遅くなってしまいました。また、これから半月に一回程度しか更新できなくなると思うので先に読者の皆様には謝らせていただきます。

酷い文ですがこれからも書き続けますのでご意見ご感想など御座いましたら御気軽に投稿ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6827q/>

鴉渡り・・・。

2011年10月8日18時14分発行